

自閉症のある子どもの自立活動の授業を 組み立てる上での要点

自立活動の指導とは？

自立活動は、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域です。自立活動では、日常生活や学習場面で生じる様々な困難を改善・克服するための指導を行います。

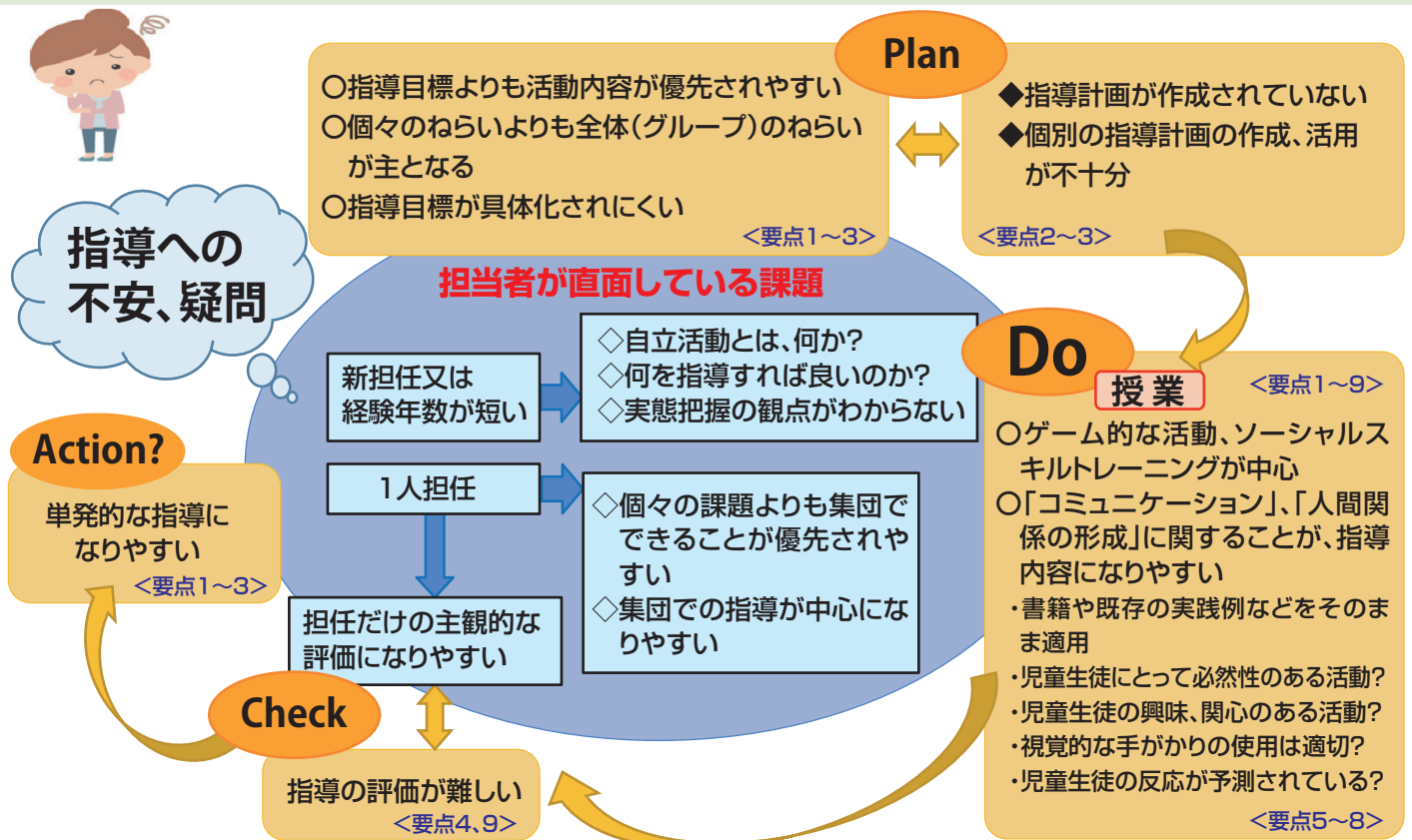
小・中学校の特別支援学級では、特に必要がある場合には、特別の教育課程によることができるとされており、自立活動を取り入れるなど特別の教育課程を編成することができます(学校教育法施行規則第138条)。

自立活動は、授業時間を設定して行う場合、各教科等と関連付けて行う場合、各教科等と合わせて行う場合などがあります。また、教育活動全体を通じて指導することも大切です。

特別支援学級を担当する先生の悩み

特別支援学級では、在籍する子どもの実態が多様であり、自閉症のある子どもが示す特性や学習様式が異なるため、個々の子どもの実態や課題に応じた指導を行うことが求められます。しかし、特別支援学級の先生においては、以下の図に示したように、自立活動の指導を行うに当たって自立活動の捉え方、実態把握、指導計画の作成、指導内容や指導方法、評価の方法など、様々な悩みを抱えています。

こうした特別支援学級の先生が直面している課題を踏まえ、特に特別支援学級の経験年数が短い先生に対して、自立活動の授業を組み立てる際に留意してほしい点を9つの要点にまとめました。



特別支援学級の先生が直面している課題と自立活動の指導上の課題

I. 個々の子どもにつけたい力(目標)を絞り込みます

要点1: 子どもの課題となる行動の背景や理由、興味・関心、得意なことを捉えましょう

①子どもの課題となる行動の背景や理由を捉えましょう

自閉症のある子どもの実態把握で最も注意が向けられやすいのは、彼らの行動面です。他者とのかかわりやコミュニケーションの困難さ、特定の活動や対象へのこだわりといった特性は、個々の子どもによりその程度や現れ方が異なります。

自閉症のある子どもの課題とされる行動を引き起こす背景や理由には、例えば、彼らにとって理解しにくい(落ち着かない)環境であること、かかわり手との関係性が十分に築かれていないといったことなどが想定されます。そのため、物理的な環境と人的な環境の両側面から彼らの行動の背景や理由を考えることが大切になります。

②子どもの興味、関心、得意なことを捉えましょう

自閉症のある子どもの指導を考える際には、困難さに焦点が当てられやすくなります。自閉症のある子どもに限らず指導の効果を高めるためには、学習への意欲や主体性は不可欠です。自閉症のある子どもの学習への動機付けを高めるためには、彼らの好きなことや関心のあること、得意なことを把握することが大切となります。そのうえで、自閉症のある子どもの興味・関心や得意なことを活かす視点をもって指導を行い、彼らが自らを肯定的に捉えることができるようにしましょう。

③個別の指導計画には、子どもに関する肯定的な内容についても記入しましょう

個別の指導計画の作成に当たっては、自閉症のある子どもが有する「困難さ」や「課題」とともに、「興味・関心」、「得意なこと」、「進んで取り組むこと」など、彼らの肯定的な側面について記載する項目も設けましょう。

要点2: 長期目標と短期目標を設定しましょう

—子どもにつけたい力(目標)を具体化しましょう—

自閉症のある子どもに関する実態を把握し、彼らのおおよその全体像を捉え課題が見えてきた次の段階には、「彼らにどのような力をつけていきたいか」について考えましょう。課題が複数出てくると、すべての課題に対応しなければいけないように感じ、何から手をつけたら良いかが分からなくなります。まず、どの課題から取り組んでいくか優先順位をつけ、目標を絞り込んでいきましょう。

①目標の設定期間を定めましょう

長期目標と短期目標には、その期間の設定に明確な決まりはありませんが、先生方が子どもの姿をイメージでき、見通しのもてる期間にすることが望ましいです。

本研究所の調査から、長期目標のスパンは「1年間」、短期目標のスパンは「学期ごと」で設定することが、特別支援学級の実情に適していると思われます。



②長期目標及び短期目標の設定に当たって、次のことに留意しましょう

短期目標は、達成までにかかなりの時間を要する目標を立てたり、抽象的な目標を立てたりしないことが大切です。大括りに目標を立ててしまうと今、何を指導しているのかが不明確となり、評価の観点も曖昧になってしまいます。子どもの姿は、日々の指導や体験の積み重ねによって変化します。そのため、決定した目標が、子どもの実態に即していない(例えば、目標が高すぎる、あるいは低すぎる)ことに気付くことがあります。このため、設定した目標を振り返り、子どもの実態に応じて修正する柔軟性をもつことが大切です。

個別の指導計画を作成する際には、①で述べたように、長期目標を「年度」、短期目標を「学期」で設定し、自立活動の指導目標と具体的な手だてを記入するようにしましょう。

要点3: 長期目標と短期目標を踏まえて単元を設定しましょう

①長期目標と短期目標に基づいた指導目標を設定しましょう

自立活動の指導の難しさは、教科指導のように指導すべき内容が決まっていないことです。そのため、子どもの実態から指導内容を考えることになります。この際、『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』を参考にしましょう。自立活動の6区分(健康の維持、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーション)26項目から必要な項目を選定し、選定した各項目を相互に関連付けながら指導しましょう。指導目標は、子どもの実態(課題)から設定した長期目標と短期目標に基づいて、指導目標を設定することが大切になります。

②計画的に指導を進めるために指導計画を作成しましょう

長期的な指導の見通しをもつためには、年間で自立活動の指導計画を作成することが望ましいです。しかし、特別支援学級の先生からは、「指導計画の立て方が分からない」、「自立活動では、この時期に、この指導を行うというように明確に区切って計画を立てることが難しい」などの課題が挙げられています。そのため、まずは、短いスパン(学期ごと)で指導計画を作成することが現実的でしょう。

③長期目標、短期目標、各単元の目標の関連性を意識しましょう

一連の指導の流れを見通すことができ、長期目標や短期目標、そして各単元の目標との整合性や関連性を一望できる計画書(指導計画例を参照)があると、【要点2】とのつながりも意識できるようになります。

長期目標と短期目標に基づきながら、各学期で取り上げる単元とその指導目標、指導内容を簡略化して一覧にした指導計画を作成することで、それぞれの関連性を意識した指導ができるようになります。

④集団での指導における全体目標の設定を工夫しましょう

特別支援学級では、複数の子どもを対象に集団で指導を行うことが多く、個々の子どもの課題は様々であるため全体目標を設定することに難しさがあります。こうした場合、個々の子どもの指導目標を明らかにした上で共通点を見つけ、それを全体目標に掲げると良いでしょう。

自立活動の指導計画例

○児の実態を踏まえた課題		
長期目標(年間)		
短期目標(○学期)		
単元及び指導目標・指導内容	○月	単元名: (○時間配当) <input type="checkbox"/> 時間における指導 <input type="checkbox"/> 各教科等に自立活動を関連付けて指導 <input type="checkbox"/> 交流及び共同学習 全体目標: ○児の目標: 指導内容:
	○月	単元名: (○時間配当) <input type="checkbox"/> 時間における指導 <input type="checkbox"/> 各教科等に自立活動を関連付けて指導 <input type="checkbox"/> 交流及び共同学習 全体目標: ○児の目標: 指導内容:

課題、長期・短期目標は、個別の指導計画の内容を転記する

個別による指導の場合は、省略する

複数の子どもが在籍する場合は、それぞれ記入する

⑤子どもの実態の変化などに応じて指導計画を見直しましょう

前年度と今年度の子どもの姿は同じではありませんから、それに応じて指導計画を見直すことが大切です。子どもの実態の変容によって指導計画を見直すことが大切になります。

⑥指導内容、指導方法などを検討しましょう

初めて特別支援学級を担当している先生方の一番の悩みは、「自立活動では何を指導すれば良いのか分からない」というものが多いです。

自立活動の指導で子どもに「何を」、「どのように指導するか」を考える際には子どもの有する課題や彼らにつけたい力に基づくことが大切です。そのため、書籍などの既存の実践例や過去の事例などを参考にすることも1つの方法です。ただし、実践例などに示されている内容や方法が、目の前の子どもの実態に合致するとは限らないため、そのまま適用することには注意が必要です。子どもの目標を踏まえて、取り上げる内容や方法を変更しましょう。

また、指導内容や指導方法が、子どもにとって必然性があるか、子どもの学びにとって意味があるかについて考えることが大切になります。



⑦各単元のつながりを意識しましょう

指導が単発的にならないようにするためには、各単元のつながりを意識することが大切になります。各単元の指導目標には、柱となる長期目標や短期目標が反映されているかを確認しましょう。

要点4：自立活動の学習指導案(略案)を作成しましょう

①本時の目標に「全体目標」と「個々の子どもの目標(個人目標)」を明記しましょう

特別支援学級の自立活動の指導では、学級の子どもの在籍状況によっては個別による指導の形態をとることが難しく、集団での指導にならざるを得ない状況があります。学習指導案(略案)には、集団での全体目標だけでなく、集団の中での個々の子どもにねらう目標を明記しましょう。

また、本時の展開の指導・支援方法を記載する欄や各学習活動における指導上の留意事項の欄に、「全体への指導・支援(留意事項)」と「個々の子どもへの指導・支援(留意事項)」を明記しましょう。

②「評価の観点・方法」を明記しましょう

実際の指導が、設定した指導目標(ねらい)に沿ってどのように行われたのか、また、全体そして個々の子どもの指導目標(ねらい)が達成されたのか、何が課題として残ったのかを押さえることは、次時の指導につなげたり、改善したりするために重要です。そのため、評価の観点は、本時の目標に位置づけた全体目標や個々の目標に基づいて設定しましょう。

③自閉症のある子どもの障害特性や認知特性を踏まえた支援や配慮について考えましょう

学習指導案の項目には、「環境設定(場の配置)」、「板書計画」、「教材・教具の工夫」、「準備物」などがあります。自閉症のある子どもの障害特性や認知特性を踏まえた支援や配慮が、指導目標の項目とともに重要となります。

Ⅱ. 自閉症のある子どもの障害特性や認知特性に留意して指導を考えます

要点5: 動機付けを高める学習活動や教材を取り入れましょう

自閉症のある子どもの障害特性の1つとして「活動や興味の局限」があり、反復性や常同性を好む傾向があります。このため、自分の好きなことをいつまでも続けたり、興味・関心のない学習活動や教材には取組みにくく、身に付けさせたい能力が身に付きにくい場合があります。

一方で、興味・関心や成功体験のもてる学習活動や教材を取り入れることで、彼らの動機付けを高めることができます。

ただし、興味・関心があるからといって、そればかりを学習活動や教材に取り入れると、かえって自閉症のある子どもの学習の妨げになる場合があるため注意する必要があります。

要点6: 子どもの主体的な発言や行動を大切にしましょう

自閉症のある子どもは、教師の指示を十分に理解できない、あるいは興味・関心の偏りにより教師の予想していない発言や行動を示すことがあります。教師が彼らのそうした発言や行動に気付かなかつたり、受け流したりすることで、彼らの学習活動への興味・関心がなくなり、結果的に授業の目標が達成されないことがあります。また、自閉症のある子どもにおいては、他者とのかかわりをもつことやコミュニケーションの困難さがあります。このため、彼らからの自発的なコミュニケーションを促し、主体的な発言や行動を大切にすることが重要になります。

【要点9】で述べますが、学習指導案の作成時に想定していなかった子どもの主体的な発言や行動については、授業後にそれがどういった場面で、どういった理由で見られたのかなどについて考え、次時の指導の改善につなげていくことが大切になります。

要点7: 視覚的な手がかりの機能を考えて活用しましょう

自閉症のある子どもには、特性の1つに視覚優位があります。そのため、絵や写真、具体物などを提示することは、彼らの理解を助ける手がかりとなります。また、視覚的な手がかりは、彼らの能動的な参加を促したり、抽象的な概念の理解を助けたりします。

多くの特別支援学級では、指導方法の1つとして視覚的な手がかり(絵カードや手順表など)が用いられています。しかし、自閉症のある子どもが視覚優位であるからといって、どの子どもに対しても同様の視覚的な手がかりを用いれば良いということではありません。

例えば、視覚的な手がかりが多すぎることで、子どもが自ら考えて学習する機会が少なくなったり、何に注目をすれば良いかが分かりにくくなったりすることがあります。さらに、教師が注目してほしい部分とは異なる部分に注目してしまい、結果的に教師の指示が通りにくくなることもあります。

視覚的な手がかりを有効に活用するためには、子どもにとって何のためにそれを用いるのか、その目的や機能について考えることが大切になります。

なお、視覚的な手がかりは、子どもの実態(成長や理解の程度など)に応じて段階的に減らしていく必要があります。



要点8：情報を整理して伝えましょう

自閉症のある子どもは、教師に注目しなかったり、提示した教材に興味・関心を示さず、それ以外のものにこだわったりする様子が見られます。また、いつもと環境が異なることで、ねらいとする行動を引き出すことができない場合があります。さらに、子どもが、教師の指示の一部分にしか注意を向けていないために、活動を遂行できない場合もあります。このため、自閉症のある子どもに対しては、情報を整理して伝えることが大切になります。

情報の伝え方としては、例えば、子どもに注目すべき(してほしい)箇所を明確にして伝える、複数の情報を伝えると理解が難しい場合には、1つずつ伝えたり、キーワードを示したりするなどが挙げられます。



Ⅲ. 指導の振り返りをしましょう

要点9：指導の振り返りが大切です

本研究所が行った調査によると、特別支援学級の先生方の多くは、自閉症のある子どもの個々のねらいに基づいて自立活動の指導の評価を行っていました。これに比べて、教師自身の指導に対する自己評価は少ない傾向が示されました。自立活動の指導の評価の課題として、指導目標が具体化されていないために評価の観点があやまることが挙げられています。このため、教師が自身の指導(授業)を振り返ることは、次時の授業の手がかりを得ることができ、授業を改善するためにもとても大切です。

授業を振り返る際には、導入・展開・まとめにおいて以下の点を見ていきましょう。

- ①教師の指示・教示、②教師の発問、③使用した教材・教具、④環境設定、⑤子どもに見られたつまづきの様子、⑥子どもの主体的な学びの様子



これらのことを振り返り、次時の指導・支援の改善に活かしていきましょう。

⑤子どもに見られたつまづきの様子と、⑥子どもの主体的な学びの様子については、起きた事象とともにその理由も考えることが大切です。

自閉症のある子どもへの指導・支援においては、行動の背景や理由を考えることが重要です。

本リーフレットで紹介した「自立活動の授業づくりの要点」については、研究成果報告書やサマリー集で具体的な実践例を紹介し、解説をしています。また、自立活動の指導を計画したり、評価したりする際に活用できるツール(自立活動の指導計画、個別の指導計画や学習指導案の様式、指導の振り返り票など)も紹介しています。こちらもあわせてご覧ください。

<発行元>

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

〒239-8585 神奈川県横須賀市野比5-1-1

TEL:046-839-6803

FAX:046-839-6918

URL:<http://www.nise.go.jp/cms/8,9325,52,300.html>



<本研究についての問い合わせ先>

インクルーシブ教育システム推進センター主任研究員

情報・支援部主任研究員

柳澤 亜希子(自閉症研究班・班長)

村井 敬太郎(自閉症研究班・副班長)

(平成28年7月発行)